資料３

平成23年度三重県教育改革推進会議　第3分科会（郷土教育の推進）の審議における委員からの意見等の整理一覧表

論点、切り口	委員名	第1回会議(8/11)での委員意見等	第2回会議(9/5)での委員意見等
●小学校(幼少)の時期を中心とした体験教育、「本物」に触れる教育 ・その意義、あり方 ・手法 など	植村委員	・当幼稚園の現場からいうと、園を出たすぐ近くの地域で、たとえばお饅頭屋さんで親子がいっしょに饅頭作りを体験している。そして小学校へあがってもそうした経験が生きて、積み重ねられていく。 ・幼稚園が地域へ出て行き、地域と触れあうと、次は子どもを通して家庭と地域がつながる。その補完的なつなぎ役を、幼稚園や学校が果たすべきではと考えている。	・本物に出会わせる体験を小学校の小さいときにさせておくことは本当に有意義なことである。 ・幼稚園、幼児期において、年上のお兄さん、お姉さんが体験していくのにつられて体験していくという、「つられ体験」も大変重要である。 ・地域において、誰かが小さい子の面倒を見てくれて、色んな年代の子どもたちが交じり合う中で体験できることは、インパクトがあり心に残るため、こうした視点で、郷土の文化を学んでいく取組を支援すると効果的ではないか。
	多喜委員	・本物はやはり心に響く。興味を持ち関心が深まることが大事で、小さい時の体験ほど良い。 ・小さいときに経験したことは、大人になり、歳をとってからのアイデンティティになっていく。 ・学年ごとに決めるというより、どこかで触れる機会を、量ではなくて質的な面で、本物に触れて心を醸成できるような機会を、小さい時に作ることが大事だと考える。 ・また、子どもたちもそれぞれであり、皆が皆同じものに同じように関心を持たなければならないのか、ということも考えるべきである。全部に関心を、となると先生・大人側の負担も大変なものになる。	・保育園や幼稚園の時期の、素直に受け止める時期の体験は記憶に残るため、有意義である。 ・たとえば、農山漁村に1泊でも泊まりながら食文化体験してみるなども有意義ではないか。体験学習を泊まりで経験させると、子どもは変わって帰ってくると実感する。
	高屋委員	・気づかせるということは難しい。 ・小さいときにどんどん体験をさせると、大人になったときにその経験が甦る瞬間がある。 ・親子で何か一緒に体験するということは、親も子も一生懸命になる。そのことも大事である。	－
	皆川座長	・郷土教育というのは目標なのか,郷土に愛着を持つことが目的なのか、方法論がメインなのかが分かりにくい。 ・中にいると、三重県のよさはなかなか分からない。	・小学校における郷土教育は非常に子どもにインパクトがあり、その時期の体験・経験が郷土教育の根幹となるため、より小中学校における郷土教育を充実させていくべきである。 ・既存の郷土教育のやり方、情報発信は一方的である。子どもと対話する双方向、あるいは子ども同士など多方向でやり取りできる教育の視点も重要である（再掲）。 ・たとえば、外国の子どもが三重県に来て、県文化から体験するというのではなく、市町単位での文化体験・交流をするのではないか。
	浜辺委員	・本物のカテゴリーというのがあると思う。自然であったり、食べ物であったりとか色々あるが、その人の苦労が見えるものが本物である。お金をかけたものでない。	・外国人の文化体験で、伊賀の場合、忍者もあり、三重県の伊賀ではなく、伊賀忍者から入る（再掲）。
	中村講師		・たとえば食文化で、三重のひじきは他県のひじきとは味が違うが、試食体験のようなことを、地元でやれば地域の食文化に触れさせることが出来る。
●地域資源の活用 ・施設 ・伝統工芸 ・史跡・文化財など	浜辺委員	・伊賀市の子どもたちは、夏休みは芭蕉さんの施設を無料で回れるスタンプラリーの無料入園券があり、親子が一緒に回れるという仕組みがある。親子で行けるよう、たとえば、学校単位、保育園単位で、地域へ出て行けるバスなどの交通手段があれば、もっと施設・資源の活用ができる。新県立博物館にも同様のことが言えるのでは。モクモクファームで	・伊賀の、芭蕉、くみひも、伊賀焼き、忍者と、博物館に映像があり、もっと有効活用すべきである。 ・外国人の文化体験で、伊賀の場合、忍者もあり、三重県の伊賀ではなく、伊賀忍者から入る（再掲）。 ・「道」のもの、たとえば伊賀や松阪は茶道文化が盛んであり、地域ごとに異なる道の文化に触れることも大切である。
	高屋委員	・鳥羽では恐竜の化石という資源があるが、子どもたちが泊まりで福井の恐竜の化石の博物館見学に行ったり、他の地域でもいろいろな体験ができるツアーがあり、そうした経験で地元の鳥羽と、他の地域を織り交ぜて学んでいる。そうした子は津で見つかったミエゾウの化石へ興味が湧くなど、関心が広がっていく。	－
●人材の育成・活用 ・地域の人材 ・教職員 ・コミュニティ・スクール	高屋委員	・本物に触れる、体験させることのできる機会を、どこで、どれだけ作ってあげられるのか、学校か、地域か、家庭か、その子にとっていいタイミングで、誰が（どこで）そうした機会をプレゼントしてあげられるのか、だと思う。いい先生がいることが一番。	－
	皆川座長	・保護者、地域への啓発はどうなのか？　先生がいいことを教えても、地域で間違ったことを教えてしまうこともある。保護者も頑張っていただければ、子どもも三重県への愛着を持てるように思う。 ・保護者が三重県に愛着を持たなかったら、子どもも持たない。保護者がいい県だと思えば、子どももそう思う。 ・・地域に絵や書道の達人など人材はいる。そういう方を活用しないのはもったいない。	・郷土教育推進のための人材の確保、教職員の資質の向上が重要である。
	田尾委員	・高校の場合は、校区が広いためなかなか難しい面もあるが、逆に言えば、広い分だけ、動き方によっては、郷土教育のための人材の確保できる面もあるように思う。 ・地道に、地域に対して、何か協力できることはないか、ちょっとしたことでも、学校が出来ることを考えてボールを投げていくと地域から反応が出て、それに対して学校が出来ることが見つかる。そうしたことから進めていけば、広がりが徐々に出てくる。 ・紀南高校では、地域の文化財の案内地図を、美術部の生徒が協力して制作し、地元の方に大変喜ばれたこともあった。	－
	多喜委員	・たとえば、退職した人の中にもさまざまな職種・経験をされ、すばらしい能力、エネルギーのある人がおり、そうした人たちをどう活用するかが重要である。 ・能力ある人に入ってもらいやすくするために、敷居を低くする工夫、仕組みづくりが要る。	－
●職場体験、インターンシップ	浜辺委員	・インターンシップでモクモクファームが受け入れているのは、内閣府事業としてのもの、また大学生が、あるいは地域の小中学校から連絡があったり、という形である。 ・農村の文化というか、伊賀の文化に触れるという面もある。	－
	田尾委員	・中学生の職業体験として毎年2-3名を預かっているが、遅刻するやら、言うことを全く聞かないやらで、最近、事業者間でも生徒の質が悪いという話をしている。生徒の割り振りというか、やり方を考えなければ、受け入れ先がなくなるかもしれない。 ・紀南高校では、2年生の1年間を、毎金曜日にインターンシップを行っており、その成果は生徒個々で差もあって評価は難しいが、学校だけではなくて、地域社会に出る、1年間のそういう時間があるというのは意味が大きいと思う。	－
	皆川座長	・職業体験は、キャリア教育というより、どちらかというと郷土教育に近い部分もあるのかもしれない。 ・インターンシップや職場体験を通じて、郷土の歴史、文化を知り愛着を育む面がある。	－
●教材、カリキュラム、 ・「三重の文化」 ・「美し国かるた(仮称)」	高屋委員	・せっかくの教材冊子「三重の文化」は中学生全員に広く配布すべきである。算数の教科書は捨てても、この冊子は、親は捨てずに子どもに渡せるものだと思う。	
	植村委員	・子どもたちに関心を持たせること、体験できることは大事であり、本物の重みを感じさせる、その機会をどう作っていくのか、地域がやるのがよいのか、学校がやるのなら、カリキュラムの中に組み込めればよいと思う。	・「三重の文化」の映像版があれば、読むだけでなく、見て聞いて学べて良いと思う。 ・「三重の文化」に、もっと子どもの探求心をくすぐる一文や、探求のヒントを少し入れると良い。
	浜辺委員	－	・モクモクファームにおける食文化体験活動も低学年期から始めているが、低学年と、3・4年生、高学年と、分けてカリキュラムや内容を考えていった方がよい。 ・まちの文化や、お祭りごとについて、学校単位で取り組んでいける方法があれば良い。
	皆川座長	－	・「三重の文化」をベースに、いろいろな情報発信ができる（再掲）。 ・たとえば、調理実習において食文化を学ぶなど、さまざまな普段の教育で郷土教育は可能である。
	多喜委員	－	・かるたについて、国際的な視野も含めて考えると、たとえば中学生くらい向けには、説明書きを英語で書くなどしてみるのも英語に触れ覚える観点で一案かもしれない。同様に、小学校、幼稚園でも、わかりやすい表現など、工夫してみる価値はあるのではないか。
	中村講師	－	・群馬県の「上毛かるた」も、県内各市町から平等に掲載ネタを集めるというよりも、後世に伝えたいものを取り上げていると思われ、また、説明書きにも礼節の心得や、ちょっとした遊び心をくすぐるルール紹介等も入っており、「美し国かるた」も、こうしてことをいいとこ取りしていけば良い。 ・高校生に「三重の文化」の映像版を制作してもらってはどうか。 ・「三重の文化」で、たとえば松浦武四郎の紹介に「北海道の名付け親」のキャッチコピーがないのはどうなのか。そうした、ひきつけるものがないと、まず読もうという気になりにくいと感じる。
●情報発信 ・メディア活用 など	皆川座長	－	・「三重の文化」をベースに、いろいろな情報発信ができる（再掲）。 ・既存の郷土教育のやり方、情報発信は一方的である。子どもと対話する双方向、あるいは子ども同士など多方向でやり取りできる教育の視点も重要である（再掲）。
	中村講師	－	・観光分野でよくあるような、たとえば中学・高校生になってくれば、自分たちが興味を持った素材を動画・映像制作して発信するようなことを郷土教育の中で実践できれば面白い試みになる。 ・ゆるキャラの中には郷土の文化の要素も入っているのもあり、そうした感覚も取り入れれば良い。